

# 2つの学校が次代を見据えて、「学校教育デザイン」の構築に着手

「学校教育デザイン」は、どのような体制や方法、進め方で描いていけばよいのだろうか。学校の規模も置かれた環境も異なる2校による、「学校教育デザイン」を描く取り組みを通して考えていく。

## 事例 1 千葉県立幕張総合高校

### 進路・学習指導の体系化を機に、育成を目指す 資質・能力の明確化、教育活動の改善を図る

2019年度に進学重視型の総合学科に移行予定の千葉県立幕張総合高校。総合学科への移行、並びに大学入試改革への対応に向けて、育成を目指す資質・能力の明確化と3年間の指導の体系化に動き出した。

#### 取り組みの背景

### 進学実績が好調な今こそ、 次の発展に向けた手を打つ

千葉県立幕張総合高校は、1学年の生徒数が約770人、教師数も総勢180人余りという大規模校だ。生徒も教師も人数が多いため、教育活動や指導は学年単位で行われるこ

とが多く、進学実績も学年の色が出やすいことが課題だった。そうした折、同校が、2019年度に進学重視型の総合学科に移行することが決定した。移行翌年度には「大学入

共通テスト」が実施されることから、双方の対応準備として、17年度の学校の重点目標の1つに「目指す将来像の検討」が掲げられた。進路指導主事の真田信弘先生はこう語る。

「本校ではここ数年、進学実績が上昇傾向にあり、さらに全国大会に出場する部活動が増えるなど、学校全体が活気づいています。そうした前向きな雰囲気があり、学校と教育

制度が大きな節目を迎える今こそ、本校の今後の発展を考えた将来像を全校で共有し、指導の体系化を図りたいと考えました」

同校は、まず、育成を目指す資質・能力の明確化と、進路・学習指導を中心とした3年間の指導の体系化に着手した。「大学入学共通テスト」を初めて受験する新1年生の入学を約半年後に控え、該当学年の指導計画立案に向けて動き出すためだ。

「本来なら、学校行事や部活動なども含めたすべての教育活動について検討すべきだと思いますが、本校は組織が大きく、一度にすべてを行うのは難しい状況です。そこでまず、大学入試に直結する進路・学習指導の改善から始めました」（真田先生）  
17年夏、教頭、各分掌の主任、各

千葉県立幕張総合高校

◎1980年度に千葉県立幕張東・西・北高校の3校が集合形態を採る学校として幕張新都心に設立された後、96年度に総合選択制の高校として統合。2004年度、県立若葉看護高校を統合し、看護科(5年制)が設置される。校訓は「自立自尊・協調親和」。

◎設立 1996(平成8)年

◎形態 全日制/普通科・看護科/共学

◎生徒数 1学年約770人

◎2016年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は筑波大千葉大、お茶の水女子大、東京外国語大、東京学芸大などに53人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ1261人が合格。

◎URL <https://www.chiba-c.ed.jp/msh/>



千葉県立幕張総合高校  
真田信弘 さなだ のぶひろ  
教職歴31年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。国語科。



千葉県立幕張総合高校  
菅田広 すがた ひろし  
教職歴31年。同校に赴任して9年目。進路指導部。英語科。



千葉県立幕張総合高校  
竹林靖浩 たけはやし やすひろ  
教職歴31年。同校に赴任して4年目。1学年主任。英語科。



千葉県立幕張総合高校  
中山悦夫 なかやま えつお  
教職歴28年。同校に赴任して12年目。総合学科部長。理科(物理)。



千葉県立幕張総合高校  
榎枝孝洋 えのえだ たかひろ  
教職歴12年。同校に赴任して5年目。3学年主任。保健体育科。

図1

幕張総合高校の「学校教育デザイン」の流れ

・育成を目指す資質・能力の明確化と進路・学習指導の体系化を目指すし、教頭、各分掌の主任、各学年主任らによる「大学入試対策委員会」を設置

・第1回ミーティング 委員会の趣旨を説明した上で、10月までに、育成を目指す資質・能力の明確化と、3年間の指導ストーリー及び教育活動計画の具体化が目標であることを伝えた(8月)

・第2回ミーティング 「生徒に育みたい資質・能力」について、自身が見てきた生徒や指導内容を思い返ししながら、参加者全員がリレー形式で述べ、育成を目指す資質・能力の共通理解・認識を図った(9月)

・第3回ミーティング 3年間の指導ストーリーを描くため、各学年の各時期における重点指導方針とそれに沿った教育活動を、学年ごとのグループで話し合った(10月)

・第4回ミーティング 1学年の進路・学習指導に関する各教育活動について、時期・目的・内容などが適切かどうか、ペアで検討した(10月)

学年主任ら十数人による「大学入試対策委員会」を立ち上げ、まずは10月までに、育成を目指す資質・能力と進路・学習指導における教育活動計画を検討することとなった。進路指導部の菅田広先生は、その意義を次のように語る。

「大学入試が思考力・判断力・表現力などをこれまで以上に問う入試

ステップ1 「生徒に育みたい資質・能力」を明確化する

育みたい資質・能力を自身の指導に落とし込んで具体的に述べ、共通理解・認識を図る

メンバー全員が語ることでつくり上げる

8月下旬、「大学入試対策委員会」の第1回ミーティングが開かれた。真田先生から、同委員会の趣旨と、10月までの中間目標として、「生徒が在学中、『どの時期』に、『どのようなことを目標』とし、『どう行動』し、それらを『どう評価』し、『どう改善』するかを具体化する『3年間の指導ストーリー』を作成する」と、それをメンバー全員による共同作成とすることが説明された。真田先生

になるならば、我々の授業にも変化が求められます。『大学入試改革については進路指導の担当』という考え方はなく、学校全体で取り組む必要があります。本委員会で教科・学年・分掌を超えて話し合い、物事を決めていくことで、学年別の体制から学校全体で動く体制へと転換する端緒とするねらいもありました」

は、「忌憚のないご意見をいただきたい」「委員会メンバーの先生方全員でつくっていききたい」と何度も伝え、参加者全員でつくり上げるといふ雰囲気づくりに努めた。総合学科部長の中山悦夫先生は、この委員会に期するものがあつたと語る。

「各教科や各分掌などでは、担当者のみが受け継いできた思いや方針なども多くあります。委員会のメンバーは十数人といえ、教科や学年、分掌を超えた形で指導について話すことで、それぞれが持つ情報を共有できます。本校は開校から22年目と

なり、初期の頃と比べて教育を取り巻く環境や生徒の気質も変わってきています。今回の委員会は、これまでの取り組みを整理して、本校が進むべき道を探る絶好のチャンスになると思います」

最後に、次回の検討課題である「生徒に育みたい資質・能力」について、真田先生が同校の「平成29年度学校経営重点目標」の「具体的目標」を基に作成した草案を提示(図2)。それを基に、進路・学習指導に落とし込むとどういった力になるのかを考えることが事前課題として出されて、第1回ミーティングは終わった。

## 自身の指導を振り返り、育てたい資質・能力を再認識

第2回ミーティングでは、「生徒に育みたい資質・能力」の具体化を通して、その共通理解・認識が図られた。

まず、真田先生が、第1回ミーティングで示した草案をさらに練り、5つの資質・能力にまとめて「幕総スキル」という仮称で提案(図2)。この5つの資質・能力は、担当教科の授業や学習・進路指導では具体的などのような力・姿勢・態度を生徒

に育むことになるのか、メンバー全員がリレー形式で述べていった。1度の発言は1人30秒以内というルールを設けたところ、多様な指導場面の資質・能力が具体的に示され(図2写真)、委員会のねらいとする共通理解・認識が図られていった。

「主体性」「発信力」「客観視」など、教科や分掌の異なる教師から同じような言葉が繰り返し挙げられたことで、それらの育成の重要性を再認識したと、菅田先生は語る。

「担当教科の英語の授業では、表現力や説得力を育もうとペアワークやグループワークを採り入れていきます。ほかの先生からも同じような発言があり、自分の指導の方向性は合っていたのだと確信できました」  
3学年主任で保健体育科の榎枝孝洋先生も、自身の指導を振り返る機会となったと語る。

「保健の授業では、授業を活性化させようとグループワークや発表を多く採り入れていますが、それは発信力や表現力の育成につながっているのだと思いました。多くの生徒にとって入試科目ではない保健体育において、それを学ぶことにより、『何ができるようになるか』を明確化する

図2 「生徒に育みたい資質・能力」案の変化

第1回案

〈2017年度の具体的目標に基づいた案〉

- 1 学習指導 行動力(主体的実行力)、分析力、行動力(工夫力)
- 2 進路指導 挑戦力、傾聴力、分析力
- 3 生徒指導及び特別活動 行動力(自己摂生力)、分析力

社会適応力 自己分析力 創造力 主体的実行力 継続力

第2回案

〈第2回ミーティングのまとめ〉

- 社会適応力
  - 読解力(情報を正しく理解する力)
  - コミュニケーション能力
  - 日常英語力
  - 諸条件に対する対応力
- 自己分析力
  - 復習し分析する力
  - 自己客観視能力
  - 的確な目標設定能力
  - 正しい初期行動
  - 日常生活修正力(記録をつける)
- 創造力
  - 言語化して発信する力(プレゼンテーション力)
  - 的確な目標設定能力(キャリア教育)
  - モチベーションアップ力
  - OA機器を正しく使う能力
  - 英語コミュニケーション能力
- 主体的実行力
  - 自分の行動を他者に説明する能力
  - 自分の現況を理解し自信に結びつける能力
  - 知的向上心
  - 疑問解決能力
  - 授業を主体的に活用する能力
- 継続力
  - 日常思索能力
  - 興味・関心喚起能力
  - 発見力
  - 日常継続力(英語活用・読書・学習工夫)
  - 初志貫徹力(第1希望を諦めない)

→これらの発言から **発信力** に変更

幕総スキル(仮称)

第3回案

- 社会適応力
 

自分を取り巻く多様な社会をグローバルな視点で正しく理解し適応する力
- 自己分析力
 

自分の能力や生活を客観的に評価する力
- 発信力
 

自分の目指す将来像の実現に向けて、必要な能力を明確化させる力
- 主体的実行力
 

自らの能力を向上させるため、具体的かつ主体的な行動をする力
- 継続力
 

困難な状況に対し、柔軟な対処ができ、ポジティブな行動を継続させる力

\*学校資料を基に編集部で作成

ることは、生徒の学びの意欲を向上させる上でも非常に重要です。授業を通して生徒にどのような資質・能力をつけたいのかを、引き続き教科内で考えていきたいと思っています」

以上のようにして洗い出された資質・能力を基に、草案の「創造力」は「発信力」に変えられ、第3回ミーティングで改めて「幕総スキル（仮称）」として示された。

ステップ2 3年間の指導ストーリーを描く

資質・能力を育むための時期別の重点指導方針を基に、指導の工夫点・改善点を見える化

入り口指導の重要性を再認識

第3回ミーティングでは、第2回ミーティングで具体化した「幕総スキル（仮称）」を3年間でどのような身に付けさせるか、その指導ストーリーを検討した。

千葉県教育委員会に提出した進路指導の年間計画を基に、志望校合格という目標に向けた3年間の各学年

での前期・後期の重点指導方針案を、真田先生が提示（図3）。メンバーは担当学年にかかわらず関心のある学年を選び、その重点指導方針案に対して、まずは個人で「共感するポイント」とその理由「重点指導方針案をよりよくするアイデア」「重点

指導方針案を実現する具体的な教育活動」について考え、それらを付箋に書いて、その後は学年ごとのグループに分かれて議論した（図3写真）。

最も多くのメンバーが関心を持った学年は1学年で、次いで2学年、3学年の順だった。1学年のグループでは、主に学習習慣の定着、進路意識の涵養、そして単位制のために行われている履修指導について議論された。

「現在の教育活動の順序について意見が出たり、学習と進路行事の関連性を見直したりと、ポイントとなる指導が見える化されていきました。高校3年間で1年次をいかに有意義に過ごすかが要になると、どの教科の先生も注視していること

図3 3年間の指導ストーリー・重点指導方針案

学年	時期	指導方針
1学年	前期	学習習慣養成期 基礎学力養成期① 学習記録習慣の確立（「記録」と「分析」）
	後期	学習習慣確立期 基礎学力養成期② 学習状況自己分析（「評価」と「改善」）
2学年	前期	前 基礎学力養成期③ 後 基礎学力完成期① 志望の研究と具体化（得意科目の強化）
	後期	前 基礎学力完成期② 後 入試基礎力養成期 志望の明確化とその対策の立案（不得意科目の克服）
3学年	前期	入試基礎力完成期 志望実現に向けた対策の具体化
	後期	入試実践力養成期→完成期 入試本番 実力分析とその対策（出願校の決定）

\*学校資料を基に編集部で作成



各学年の前期・後期それぞれの重点指導方針を、これまでの指導実績から設定し、それらについて「共感できる点」「工夫点」「具体的な教育活動」「疑問点」を洗い出した。

が分かり、改めて1年次の指導の大切さを感じました」（榎枝先生）

資質・能力の育成には学校全体の視点が必要

最後に、各学年のグループで話し

合った内容を共有。1学年のグループからは、2学期制で指導のスパンを捉えるのではなく、定期考査に合わせて4回に分割する、または3学期制で指導を考えるとといった提案がなされた。2学年のグループからは、中だるみをいかに防ぐかが中心課題であり、徹底的に将来について悩み、

考えさせる必要性の指摘があった。

1学年主任の竹林靖浩先生は、グループワークを通じて、目標を明確に設定し、そこに向けた活動を組み立てていくというプロセスの重要性を改めて感じたと言った。

「担当教科の英語では、CAN・Dオリストを作成し、教科団で指導の目線合わせをして授業を行っていきま。今までも学年主任として、生徒一人ひとりの希望進路の実現という目標に向けて指導を組み立てていきましたが、資質・能力の育成に向けては、学年全体、学校全体の視点を持つべきだと分かりました」

# 教育活動を共感・違和感の両面から検討し、見直しのポイントを探る

## 資質・能力や全体計画から見た意見が出される

第4回ミーティングでは、「1学年 教育活動計画(案)」(図4)で提示された各教育活動について、どのような指導で「幕総スキル(仮称)」を育んでいくのかを見える化した。

「教育活動」の中から4項目を選び、2人1組に1項目ずつ割り当て、「共感した部分」「違和感のある部分」、そして「幕総スキル(仮称)」との関係についてペアで意見を述べていった(写真1・2)。

「1学年 教育活動計画(案)」には、「幕総スキル(仮称)」との関連度合いも示したため、指導と資質・能力との関係がより具体的にイメージでき、「生徒に発信力を育むならば、教師の受信力を高めなければならぬ」といった意見も出された。

「生徒に求める資質・能力の裏側には、教師に求められる資質・能力

も隠されていることを、皆が意識できたと思います」(竹林先生)

それまでの議論で「生徒に育みたい資質・能力」や3年間の指導の流れが共有されてきたこともあり、指導全体の中での位置づけを改めて考えて、各教育活動のよい点や疑問点を出し合う姿が見られた。そこでは、「進路LHRでは年間計画を立て、その振り返りを行うのだから、発信力や継続力の育成につながる」「面談で生徒の発信力を★3つ分育むには、もっと工夫の余地がある」など、育成を目指す資質・能力を意識した意見が多く出された。

「各教育活動の『違和感のある部分』では、改善点を示すものや、活動目的を再確認すべきものなど、考えさせられる意見が出てきました。そして、2学期制という枠組みや、ほかの活動とのバランスもある中で、生徒にとって効果のある時期を見計らって教育活動を配置する大切さを改めて感じました」(真田先生)

図4 1学年 教育活動計画(案)

教育活動		幕総スキル(育成を目指す資質・能力)					指導計画	
活動種類	活動名	社会適応力	自己分析力	発信力	主体的実行力	継続力	重点指導方針:学習記録習慣の確立(「記録」と「分析」)	
							4月	5月
学習指導 進路指導	課題テスト 定期考査		★★	★★★	★		課題テスト 入学前課題の学習状況を知る 本校選定テスト	第1回 定期考査 日常の学習定着度を知る 授業担当者作成試験
進路指導	スタディーサポート 校内実力テスト (模擬テスト)		★★	★★★	★		第1回 スタディーサポート 現在の学力・学習状況を知る スタディーサポート	
学習指導 進路指導	テスト 事後分析		★★★	★★	★★	★★★		第1回 スタディーサポート分析 自己学力・学習状況分析 学習記録手帳
進路指導	進路 LHR (理解型)	★★★	★★			★★	年間計画等説明 今年度の進路指導計画を理解する 進路指導部作成資料	センター試験を知る 3年後の入試の仕組みを知る 進路研究企業資料
進路指導	進路 LHR (ワーク型)	★★★	★★		★★★		学習計画を立案 年間の学習計画を立てる 本校作成ワークシート・学習記録手帳	
進路指導	進学講習	★★		★	★★★	★★	進学講習希望調査 希望進路実現に必要なことを考える 進学講習一覧・申込用紙	通年・前期進学講習開始 希望進路実現の能力向上を図る 講座テキスト等
進路指導	進路説明会 キャリア教育	★★★	★★					
学習指導 進路指導	履修指導		★★	★★				本校設定講座の理解 次年度の履修の案を組む 本校作成「履修の手引き」
生活指導 学習指導 進路指導	生徒面談	★★	★★	★★★			コミュニケーション・ウィーク 生徒が現在の状況を理解する 進路指導部作成資料	
進路指導	大学見学 オープン・キャンパス	★★			★★★			オープンキャンパス・大学見学 進学希望校の実際に触れる 進学先資料
進路指導	進路希望調査		★★	★★			第1回 進路希望調査 現段階での希望進路を定める 本校作成進路希望調査用紙	

\*学校が作成した「1学年 教育活動計画(案)」を基に編集部で作成



写真1 全員で話し合うと話が拡散しすぎる恐れがあるため、ペアワークにした。また、最後に、ペアワークで出てきた意見を発表し、全体で共有した。

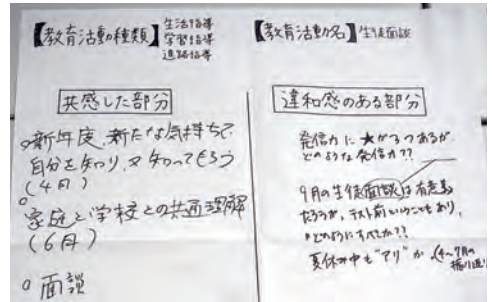


写真2 「共感した部分」「違和感のある部分」というように、プラスとマイナスの両面から意見を出し、改善の方策が具体的に見えるようにした。「この観点は、生徒に物事を考えさせる時にも活用したいと思いました」(竹林先生)

今後の展望

## 「育みたい資質・能力」の浸透によって、すべての指導改善につなげたい

前向きな姿勢が見られたことは大きな成果

進学重視型の総合学科への移行と大学入試改革への対応に向け、「生徒に育みたい資質・能力」の明確化を図り、3年間の指導ストーリーの方向性と各教育活動の改善点を探ってきた幕張総合高校。育むべき資質・能力が教科を超えて共有できたことは、今後の授業改革・指導改善を進める上で大きいと、菅田先生は感じ

ている。

「授業改革や指導改善は、具体的には各教科で進めていくことになりませんが、初めから教科ごとに検討していたら、方向性がばらばらになってしまったと思います。最初に、各教科が一堂に会して議論する場を設けたことはとても重要でした」

真田先生も、多様な意見を聞くことで進むべき方向性が見えてきたと、取り組みの成果を語る。

「話し合いを通して、先生方の前

向きな姿勢が見られたことは大きな成果です。また、先生方の多様な考えを聞き、深めていく中で、私自身、育みたい資質・能力を強く意識して指導するようになりました」

真田先生は、生徒の発表後に必ず拍手をするようになった。すると、自然と生徒も拍手をするようになり、互いに認め合う雰囲気が出てきたという。

### 少人数の話し合いから全校に意識改革を進める

今後の課題は、この動きをどのようにしてほかの教師にも広めていき、各教科の具体的な授業改革や指導改善につなげていくかだ。その鍵となるのは、一連の会議の手法ではないかと、竹林先生は指摘する。1回の会議を1時間と決めて延長しないようにし、多忙な中でも参加しやすくした。各回の目標も明確に示し、発言は1人30秒などと区切られたことで、意見を出しやすかったと言う。

「少人数のグループワークは意見を言いやすく、メンバーの意見も聞き取りやすかったです。わずか4回の会議でしたが、たくさんアイデア

アが出されました。そうした小さな場を教科や学年、分掌を超えて設けることで、目標や思いの共有化を図れると思います」(竹林先生)

そうした意識の共有化の先に、教師の意識改革が生まれるのではないかと、中山先生は語る。

「教師が努力を惜しんでいては、指導改善は進んでいきません。必要なのは、私たち教師の意識改革です。『幕総スキル(仮称)』の共有化、3年間の指導ストーリーの立案などを通して、今回のように意見を述べ合っていくことが重要だと、4回の会議を終え、自身の変化を踏まえて感じています」

また、進路・学習指導の取り組みにとどめず、すべての教育活動を含めた「学校教育デザイン」を描いていくことも、大きな目標だ。

「今回は進路・学習指導を中心に検討してきましたが、育むべき資質・能力が学校全体に浸透すれば、授業でも面談でも行事でも、おのずと資質・能力の育成を意識した指導になるでしょう。教師一人ひとりがそうした指導ができるよう、『幕総スキル(仮称)』のさらなる共有を進めていきたいと思っています」(真田先生)